

世界諸言語の語順類型研究における諸問題

—地理的・系統的語順分布に対する研究序説—

山 本 秀 樹

1. はじめに

本稿は、これまで世界諸言語の中から約3,000言語について基本語順を抽出し、語順地図および系統別分布表を作成しつつ、世界全域にわたる語順の地理的および系統的分布を考察してきた研究の序説をなすものである¹⁾。

19世紀初頭にさかのぼる初期の古典的類型論では、主に形態法のような比較的単純な基準によって各言語全体を特徴づけるような研究が中心であった。他方、特に1960年代以降、グリーンバーグ等の研究により新たに活性化した近年の類型論研究では、類型論的研究が普遍性発見の有効な手段になり得るという考えを基本に据え、普遍性研究と密接な関係を有した類型論研究が盛んになった。こうした近代的類型論の初期に当たる1960年代から1970年代には、サンプル化された多くの言語資料を基に、語順や格標示等の、比較的目に付きやすく、言語構造に広範に関わり得る重要な中核的現象について、様々な普遍的傾向を含む数々の重要な言語普遍性が発見されていった。初期の段階から、こうした普遍性に対する説明ないし理論化も試みられていたが、その後は特に理論的側面に研究の中心が移っていった。特に1990年代以降は、中核的現象に関する新たな普遍性の発見は比較的少なくなって、補文構造や文法化等の、どちらかと言えばやや細かな現象に類型論研究の対象が移り、主として機能的ないしは認知的な研究と結びついた観点からの理論面が中心になってきており、言語類型論研究全体が成熟期に達し、煮詰まってきた感がある。そこで、従来の類型論研究に対して、これまで比較的扱われることが少なかった観点からの研究により、新たな方向性を見いだすことは有用であろう。

過去の類型論で軽視されてきた面として、地理的および系統的な側面がある。従来、多くの類型論研究では、真の普遍性を導くために、地理的、系統的な偏りを避けた言語サンプルを作り、その後は、各言語がどこで話され、どのような系統に属するかということは捨象した状態で研究が行われてきた。それに対し、本研究のように、地理的、系統的な要因を積極的に考慮し、世界全体にわたって実際の地理的、系統的な分布を見ていくことで、人類言語の特性について、より正しい認識、さらには新たな知見が得られる可能性が考えられる²⁾。

筆者は、これまで約3,000言語(正確には2,932言語)について、種々の基本語順特徴を抽出し、これらのデータを系統別に分類し、主として国別、あるいは、必要に応じて国の内部を数葉に分けた

詳細な語順分布図を作成、分析しつつ、研究を進めてきた。そこで、本研究全体において、これまで作成した世界諸言語の語順資料、語順地図、系統別語順分布表を基に、主として地理的および歴史的な観点から人類言語の語順を考察する。特に本稿では、本研究全体の序説として、語順類型研究における諸問題から、基本語順や整合性等の主要概念、語順データ上の問題、語順類型研究における地理的および歴史的な観点の重要性、従来の研究と比較して本研究が持つ意味や位置づけ等について論じる。

なお、本研究における地図や地理的分布というのは、言語地図の作成において通常行われているように、可能な限り原住の言語を対象にしている。たとえば、アフリカ大陸、アメリカ大陸、オーストラリア等にはヨーロッパの言語をまったく入れない形で地元の在来の言語を問題にしている。したがって、本研究で言っている現在とは、厳密には、むしろヨーロッパの言語が欧州外部に急激な拡大を開始する大航海時代直前に近いものであろう。この分布は、有史時代に主な大語族の拡散が一通り終わってから、歴史時代の範囲内で巨視的に見れば、かなり長期にわたって比較的安定していた語順分布でもある。

2. 基本語順および語順データ

本研究では、多くの語順類型論研究と同様に、各言語のあらゆる可能な語順ではなく、いわゆる「基本語順(basic word order)」を対象とし、一応基本語順を想定した上で地理的位置づけを行うことになる。当該の言語でとり得るあらゆる語順をデータにとり込む、あるいは、語順の共存があればいずれの語順もとり上げるといった形の収集は、実際、ある意味では慎重かつ正確で、また場合によっては容易でもあろうが、かえって言語の基本的、全体的パターンを見えにくくしてしまうおそれがある。したがって、言語の一般性、全体的な語順分布を正しく理解するためには、やはり可能な限り各言語の基本語順を抽出する必要がある。そこで、まず基本語順について論じることにする。

言語の中には、かなりの語順変異を許容し、基本語順を設定し難いものも存在する。これには種々の要因が関係し、たとえばアメリカ先住民諸語にしばしば見られるように、多総合的な構造をとるために独立の名詞句が出現する頻度が低く、それらの配列順もかなり自由になり得る場合や、要素間の関係が豊富な形態的手段により相当程度表示されているために語順の変異が可能になっている場合もある。また、近年の二重言語使用によって当該言語の元来の基本語順がわかりにくくなってしまっている可能性も考慮しなければならないだろう。

しかし、一方ではまた、一見かなり語順が自由に見えてもやはり1つの基本語順を決定できる、あるいは、たとえば節語順の場合、2つの語順の共存という程度に同定できる場合も多いことも事実である。たとえば、多くのスラヴ語はかなり語順を自由に動かすことが可能で、ロシア語でTanja videla Kolju.<ターニャがコーリャを見た>のような文は、格標示(Tanjaは主格、KoljuはKoljaの対格)や動詞の一致(過去の語尾 -la は女性単数の主語と一致)によりSとOが紛れることなく、脈絡による語用論的情報構造ないし情報の流れを反映して6通りのどの配列順にしても、文法的に正しい文

である。しかし、ロシア語の基本語順は、いくつかの根拠からSVOとすることができる。まず第1に、Comrie (1989, 88)によると、SVOが、他の5通りの語順をすべて合わせたよりも高頻度ということである。第2に、Mat' ljubit doč'.<母・愛する・娘>のように、ロシア語で、例外的にSとOの区別がつかないケース(mat' mo doč'も主格・対格同形、現在形のljubitは、性とは無関係に3人称単数の主語と一致)では、「母が娘を愛する」という解釈が、「母を娘が愛する」とする解釈よりもはるかに優先される。これは、以前 Jakobson (1966, 269)がとり上げ、この場合、SOが「強制的」とまで述べていたものだが、Comrie (1989, 84, 88)によれば、むしろ、ここに述べたように、SOがはるかに優先されるということのようである。ちなみに、日本語で、特定の文脈なしに「母・娘・愛する」のように格助詞を省略して言った場合、多くの日本語話者にとって、最初にイメージされる解釈は、やはり「母が娘を愛する」というものであろう。第3に、母語話者の言語直感により、最も中立的、自然、基本的と感じられる語順を尋ねられた場合、ロシア語の母語話者であれば、通常、SVO語順を選ぶであろう。第4に、これも、ある意味では母語話者の言語直感を引き出すことになり得るが、たとえば日本語なり英語なりのわかるロシア語の母語話者に、「ターニャがコーリャを見た、Tanya saw Kolya。」をロシア語で何と言うか、特定の文脈なしで尋ねた場合、瞬間的に最初に素直に出てくる文は、通常やはりTanja videla Kolju.のSVO語順であろう。ただし、この基準の場合、質問に使用した言語の語順がそれと同一の語順を誘引してしまっている可能性に注意しなければならないが、たとえば、質問の言語の語順がSOVであったのにSVOで答えたような場合には、やはり当該言語の最も中立的な基本語順を示唆している可能性が高いものと考えられる。いずれにしても、以上のような点を総合すれば、やはりロシア語の基本語順はSVOとすることができる。

基本語順を判定するその他の基準としては、名詞化による語順や、字義通りの意味での有標性が利用できることもある。前者の例としては、たとえば、日本語において、「シーザーの町の破壊」は可能だが、「町のシーザーの破壊」は不可能であることから、SOVの基本語順が示唆されるとするようなものである(影山 1985, 20)。後者の例として、たとえば、Dogs, I like. のような、英語における題目化構文は、通常のSVO構文に対してイントネーションの断絶を持つ点で音韻的に有標であり、ドイツ語やオランダ語における従属節におけるSOV構文(たとえばIch weiß, dass die Frau den Mann sah.)は、従属接続詞を持つ点で通常の単文よりも形式的に有標とみなされる(Whaley 1997, 102-104)。

むろん、これらの基準がすべて同一の基本語順を指示することが理想だが、Whaley (1997, chapter 6)の指摘するように、基本語順を認定するための基準同士で矛盾を生じることもあり得る。しかし、やはり、総合的に見て、できる限り多くの基準が指示する語順を一応の基本語順と考えるのが妥当であろう。

本研究においても、可能な限り上のような基準で基本語順をとらえるよう努めたが、現実にはそれほど総合的な判断の可能な情報が得られない言語ないし事例も多い。そこで、そのような場合には、基本的に各個別言語の記述書や論文における専門家の判断を優先させた。これらの文献の著者

は、当該の言語が少なくとも同系の言語ないし周辺の言語に関して実地調査した専門家であることが多く、これまでの、各言語の基本語順の記述においても、非意図的にせよ、概ね上のような基準から基本語順の認定が行われているものと思われる。

しかしながら、専門家の判断を優先させた場合、文献によって基本語順の判断が分かれる場合もある。その場合には、より専門的な実地調査を行っている研究者の想定する語順、より多くの研究者が認定している語順、その言語の地理的および系統的な位置から可能性のより高い語順を優先した。また、特殊な理論的枠組みのために表層と異なって設定されている語順は除外している。

また、本研究の語順データには空白箇所も少なくない。本研究の考察から示唆されるように、3,000程度の言語について語順データを収集した後は、その言語の地理的位置と系統が与えられれば、かなりの程度正確にその言語の基本語順を予測することも可能である³⁾。しかし、この種の研究では、たとえ語順データの中に多くの空白箇所を生じようとも、まず確実に抽出し得る語順データだけを収集し、それらを基に当該言語ないしその言語群の語順を考察すべきであって、データの収集段階から予測による語順をデータとして含めるべきではない。そこで、上述したように文献により基本語順の相違が見られるために地理的ないし系統的に可能性の高い語順を優先させた場合を除けば、予測的なデータは含めていない。また、原則として、断片的な例文以外に語順情報が得られない場合、その語順が可能なことはわかっても、それをその言語全体の基本語順とし得るか否かは不明であるため、その文献の著者が明確に語順を指定していない限り、そうした例文のみによる語順を基本語順のデータとして含めることも、同様に避けることにした。これらの方針から、結果的に、本研究の語順データに空白箇所を多く生じさせることになったが、世界全域にわたって、巨視的に語順の地理的、系統的分布に関する全体的なパターンをとらえるという本研究の目的には、実質的に大きな支障を生じないものと考えられる。

以上のように、十分な情報の得られない言語の基本語順に関しては基本的に専門家の判断に従ったが、理想的にはこれらすべての言語を自分自身ですべて分析した上で確実な基本語順を見出すことであるのは言うまでもない。実際、研究者自身に必ずしも当該諸言語すべてに関する知識のない、多くの言語資料を対象とした類型論的研究に対して、その研究の粗さ、時には資料の誤りに関し、特に精緻な個別言語研究を実践する学者たちから辛辣に批判されることがある。しかし、当然のことながら、自分自身で資料とするすべての言語を理解し、基本語順を調べてからであれば、この種の総合的研究は永遠に不可能となる。個別言語の研究も軽視せずに、むしろそれらの研究による恩恵に浴しつつ、多言語のデータを基に全体的、総合的な視点から研究することで明らかになることもあるのであれば、個別の正確さをできる限り意識するとともに、それらの限界も認識しつつこの種の研究を進めることは許されるだろう。本研究の主な目的は、子細に各個別言語内部を考察することよりもむしろ、巨視的に全体的パターンを正しくとらえることである。そこで、結局、現実的な手法としては、記述者ないし専門家の判断を信頼し、それに従うのが、この種の、数千の言語を対象とするような研究においては、少なくとも容認される方法であろう。

また、この節の冒頭で述べたように、本研究で扱う語順は、原則として基本語順であるが、共存が重要なし明確でデータに入れた方がよいと思われた場合には、巻末の語順資料においても、Hawkins (1983)等にならって、次のような表記法で共存語順を記載している。たとえば、形容詞(A)と修飾される名詞(N)に関し、AN/NAのように共に大文字で書いたものは、両方の語順がほぼ同程度に基本的な語順として使われることを示すが、資料収集の際に、もし可能であれば、やや優先される方を先に書くように努めた。しかし、実際には、資料からそのような微小な優位差を確認することは困難なことも少なくないので、両方を大文字で表記した場合は、その優位差が必ずしも明確ではない。明らかに一方が優勢と認められる場合には、たとえば AN/na のように、劣勢な方を小文字で表記した。ただし、劣勢な共存語順というのは、現実には、当該言語の記述者がたまたま触れている場合とそうでない場合があり、共存の度合いに関して2つの言語間であまり差がないにもかかわらず、一方の言語でしか小文字の共存語順が表記されていないということもあり得るだろうが、いずれにしても、このような小文字の表記は、基本語順をとらえる上では大きな問題を生じることではないものと考えられる。

最後に、本研究で基本語順を認定する対象の言語ないし方言について触れておく。本研究で用いた言語および系統は、必要な修正は加えつつも⁴⁾、概ね Grimes (1992)の *Ethnologue* 第12版に基づいている。*Ethnologue*は、4年おきに改訂されている。しかし、本研究では、以下のような理由から第13版や第14版の言語分類に改めることはあえて避けた。第1に、本研究は、大部分、第12版の分類に従ってデータを収集しており、言語名や方言名を、参照した記述書や文法書の記述と第12版を照合しつつ、同定したものである。そこで、本研究の語順資料を、第13版や第14版における言語(方言)分類や系統分類にそのまま直すのは、しばしば言語ないし方言の同一性に関してずれを生じるおそれがあるので、大部分の語順データを収集した時点で利用した第12版に基づいた言語名、方言名、系統分類のままにしておく方が、かえって正確さを失わずに済むと考える。第2に、*Ethnologue* 第12版の言語名および系統分類は、ほぼ同時期に出版され、入手、参照の容易な Bright (1992)の *International Encyclopedia of Linguistics* の分類でもあるという点で、他の版に比べ、一般性も高い。第3に、近年、絶滅の危機に瀕した言語として、言語数の減少が言われている中であって、*Ethnologue* は、改訂の度に言語数を増やしている。たとえば、世界の言語数として、第12版では6,528言語、第13版では6,703言語、第14版では6,809言語が収録されている。これは、大部分、以前は方言として扱われていたものが、しばしば改訂版では別個の言語として扱われているためである。この点に関しては、Terrence Kaufmanが Moseley and Asher (1994, 33, 62)の中で *Ethnologue* の1つの問題点として、*Ethnologue* は、改訂の度に必要以上に言語を分離して言語数を増やしている傾向があり、たとえば、トゥカノ諸語に関し、*Ethnologue* のように言語そのものの数を不必要に増やそうとしない方向で全体の問題を研究することが求められると指摘している。したがって、*Ethnologue* の改訂に忠実にそって言語数を増やしていくことが、必ずしも正確あるいは望ましいとは言えず、むしろ、ある段階の分類で妥協しておくことが適当と思われる。また、複数の名称を持つ言語に用

いる言語名の選択に関しては、原則として *Ethnologue* 第12版で最初にあげられている名称に従っている。特になじみの薄い言語の場合、意図せずに蔑称、あるいは必ずしも好ましくない名称が使われてしまった場合もあるかもしれないが、ご容赦願いたい。

3. 節の基本語順

本研究で扱う節の基本語順は、近年の多くの語順類型論研究と同様、原則として、(代名詞でなく)名詞による主語と直接目的語を持つ単文の平叙的主文における、最も無標の中立的な語順である。したがって、後述のように、たとえば島嶼ケルト諸語を除く現代ヨーロッパの印欧語における節の基本語順は、すべてSVOということになる。そのため、たとえばフランス語の *Elle le voit.*(cf. *Jeanne voit Paul.*)のような接語代名詞の文の語順なども、基本語順に含めていない。代名詞は、音韻的な要因(しばしば単音節)や情報構造的な要因(本質的に旧情報)を受けやすく、こうした、諸言語間でしばしば観察される、代名詞が特殊にとる語順に関しては、各個別言語の基本語順の整合性といった観点よりもむしろ、たとえば複雑度が低いものが左に置かれやすいといった趣旨の「言語に依存しない構成素の優先配列(Language Independent Preferred Order of Constituent)」(Dik 1978, 192)や、「重さによる配列原理 (Heaviness Serialization Principle)」(Hawkins 1983, 90-91)(もしくはこれを修正した松本 (1989, 13-14)による原則)などのような、他の要因から考えるべきものであろう。また、前節でも触れたように、ドイツ語やオランダ語のような従属文の動詞末位語順もここでは基本語順とみなされない。さらに、ドイツ語、オランダ語、スウェーデン語、デンマーク語などは、厳密に言えばむしろ動詞第2語順と言うべきものであろう(cf. *Der Mann gab dem Jungen das Buch. / Dem Jungen gab der Mann das Buch. / Das Buch gab der Mann dem Jungen. / Heute gab der Mann dem Jungen das Buch.*)。しかし、これは、動詞を第2位置に置くことによって文頭の題目(最も典型的には主語)を際立たせる現象で、他の多くのヨーロッパ語のSVO語順の発達と軌を一にするものと考えることができよう(松本 1991, 23, 31 参照)。したがって、ここでは、動詞第2語順をあえて別個に立てず、たとえば括弧内にあげたうち最も無標の最初のような例から、やはりこれらの言語の基本語順はSVOとする。

こうした節の基本語順間の統計的偏りは、近年の語順データの蓄積により、ますます明瞭になってきている。本研究の目的は、地理的および系統的分布の考察であって統計的分布の考察ではないが、今回、筆者の集めた語順資料で節語順データが入手できた言語のうち、前述の大文字同士の共存を持つ言語を統計資料から除き、小文字の共存を捨象して最も基本的な節語順を一つに特定した2,537言語について基本語順の比率を算出してみれば、次のようになる。まず、主語が目的語に先行するSOタイプが世界諸言語の約96%を占め、その内訳は、SOV=1,231言語(48.5%)(日本語、朝鮮語、アイヌ語、旧シベリア諸語、アルタイ諸語、東部のウラル諸語、インド・アリア諸語、ドラヴィダ諸語、チベット・ビルマ諸語の大部分、ニューギニアやオーストラリアの先住民語の多く、アメリカ大陸の北西太平洋岸と中米を除く大部分の先住民語等)、SVO=981言語(38.7%)(ケルト系を除く現代ヨーロッパの印欧諸語、標準中国語、タイ語やベトナム語やマレー語等東南アジアの諸

言語の大部分、ウェスト・アトランティック諸語、バントゥー諸語等)、VSO=234言語(9.2%)(島嶼ケルト諸語、ポリネシア諸語やフィリピン諸語の多く、古典アラビア語や聖書ヘブル語やゲエズ語等古いセム諸語の多く、ベルバル諸語、ナイル・サハラ語族のクリアック諸語やナイル諸語やスルマ諸語の一部、マヤ諸語の一部、セイリッシュ諸語等)である。次に、いわゆるOS言語の中では、比較的VOSが多く、61言語(2.4%)(台湾の高砂諸語やマライ・ポリネシア諸語やマヤ諸語等の中に散在)である。残る2つのタイプ、すなわち目的語初頭語順の言語は、大部分、南米のアマゾン流域の言語であるが、OVS=18言語(0.7%)(アパライ(Apalaí)語、ヒシカリヤナ(Hixkaryána)語等)、OSV=12言語(0.5%)(アプリニャ(Apuriña)語、ナドゥブ(Nadëb)語等)があげられる程度である。

上の統計的な比率は、たとえばTomlin (1986, 18-22)でもまとめられているように、語順資料を得た言語をそのまま数えたもの(Ruhlen 1975, Matsumoto 1992)にせよ、ある程度のサンプリングをかけたもの(Greenberg 1966, Ultan 1969, Mallinson and Blake 1981, Tomlin 1986)にせよ、こうした、これまでに数十ないし数百の言語を基に算定されてきた多くの結果と、それほど大きな違いはない。

SOV=37.0% SVO=43.0% VSO=20.0% VOS=0.0% OVS=0.0% OSV=0.0%

(Greenberg 1966)

SOV=44.0% SVO=34.6% VSO=18.6% VOS=2.6% OVS=0.0% OSV=0.0%

(Ultan 1969)

SOV=51.5% SVO=35.6% VSO=10.5% VOS=2.1% OVS=0.0% OSV=0.2%

(Ruhlen 1975)

SOV=41.0% SVO=35.0% VSO=9.0% VOS=2.0% OVS=1.0% OSV=1.0%

Unclassified=11.0%

(Mallinson and Blake 1981)

SOV=44.78% SVO=41.79% VSO=9.20% VOS=2.99% OVS=1.24% OSV=0.00%

(Tomlin 1986)

SOV=49.3% SVO=35.0% VSO=11.2% VOS=2.8% OVS=1.0% OSV=0.6%

(Matsumoto 1992)

あえて主だった相違点にいくつか触れれば、Greenberg (1966)の先駆的な研究における30言語のサンプルは、他の統計と異なり、SVOがSOVを上回り、VSOの割合も比較的高くなっているが、これは、主にそのサンプル数の少なさや、たとえばニューギニアやメラネシアなどの言語を含まずに、印欧諸語やアフリカ大陸の言語を過度に含む等、サンプルの偏りに起因するものであろう。また、Tomlin (1986, 18-22)は、こうした従来の語順類型論で統計に使われた言語が十分代表的なサンプルになり得ていないことを批判した後、上に記した自らの統計結果を基に、SOV=SVO>VSO>VOS=OVS>OSVという相対的頻度を提示している。このように、Tomlin (1986)は、SOVとSVOは実質的に差がないものとみなし、その前提に立って、こうした統計的偏りの説明に向かっている。しかし、筆者の統計も含め、上の多くの統計結果から示唆されるように、やはりSOVがSVOを上回ると見る方が適当であるように思われる。実際、地理的分布を見ても、少数のOS語順

を除けば、SVOとVSOを合わせた地域が、SOVの地域とほぼ同等の分布を占めている。すなわち、前者は、ヨーロッパ、中東からアフリカ大陸にかけての大半、東アジアおよび東南アジアからオーストロネシア地域に分布し、後者は、シベリアから南アジアにかけての広大な地域、オーストラリア、ニューギニア、アメリカ大陸の大半に分布している。また、本研究で行うように、世界諸言語における語順の地理的、通時的な推移を考察すれば、むしろ、SVO語順は、多くの語族ないし言語にとって、比較的后代の言語変化により生じてきた語順である可能性が高い。また、Dryer (1989, 259, 269-71)も、「言語群(genera)」(概ね同等の時間的深さで再建される系統的な言語グループ)単位の分布から、SOVの方がSVOより優位であることを論じている。さらに、OS語順に関しても、Tomlinは、OVSがVOSと同等のように見ているが、筆者の統計も含め、上の統計を総合すると、むしろOVSの頻度は、OSVの頻度に近いと考えた方が適当であろう。実際、地理的分布を見ても、VOS語順は、特にVSOが現れる地域の周辺に、時にその交替語順として比較的好く見られる語順であるのに対し、OVSとVOSは、上述のように、大部分、世界でアマゾン流域という限られた地域に共に現れている非常に低頻度の語順と見ることができる。したがって、あえてTomlinにならって相対的頻度を記すとすれば、むしろ、SOV>SVO>VSO>VOS>OVS=OSVとすべきであろう。

いずれにせよ、上のような結果からまず注目されるのは、確かに、数字の上でのいわゆる統計的な偏り、分布であろう。そして、その意味での偏りに関しては、たとえばTomlin (1986)等によって説明が試みられてきた。しかし、上のような数字によるデータは、世界諸言語の中から、たまたま語順データが入手できた言語の数をそのままパーセンテージに表したのか、あるいは、サンプリングの不十分な資料に基づいたものである⁵⁾。そこで、Dryer (1989, 258-59)が指摘するように、より慎重にサンプルを選んで統計を出した場合には、上のような数的な分布はやや異なったものになる可能性もある。たとえば、Dryer (1989, 269-71)が、言語数ではなく、言語群(genera)の数によって算出した節語順の統計では、SOV : SVO : VSO=111 : 57 : 22(58.4% : 30.0% : 11.6%)という割合になる。ただし、このことから、言語数による統計がまったく無意味ということになるわけではない(事実、上にあげられた数値にも見られるように、十分大きな言語数をそのまま算出した割合も、全体的な傾向として見れば、Dryerのものも含め、サンプリングをかけた割合と、必ずしもそれほど大きな違いが生じているわけではない)が、確かに、単純な言語数による数的割合だけを過度に重要視することには、ある程度の注意を要するかもしれない。

語順資料から注目すべき点は、本研究で見ていくように、数的な偏りよりもむしろ各語順タイプの地理的な偏り、分布であろう。そして、それを十分に観察し、諸言語の整合的語順タイプに反している要因を考察するには、Dryer (1988, 1989, 1992, etc.)のような偏りのないサンプルを考察するというよりもむしろ、可能な限りの広範なデータを基に諸言語の実際の地理的位置を地図上で考察してみることである。事実、上にあげた諸言語に代表されるように、各基本語順がいかに関地理的に連続した形で現れているかが見てとれる。

各地域ごとの語順の地理的分布については、本研究で後に詳細に扱うが、ここでは、節語順の地

理的分布について全般的な観察結果をいくつか述べておく。まず、OVSとOSVは、上述の南米地域以外では散発的にごくまれに見られるのみである。また、VSOは先にあげた地域が大部分で、VOSは、上でも触れたように主としてVSO圏の周辺部にあり、この2つのタイプの動詞初頭型としての共通性が地理的分布にも暗示されているものと言えよう。SVOは、地球上でヨーロッパ、アフリカ大陸、東南アジアの3つの地域に特にかたまっている。それ以外の地域では、アジア北部、インド亜大陸等、広い範囲にわたってSOV地域が連続している。特に、上述の、SVOが連続的に占める主要3地域も、おそらく北アフリカを除いてアフリカ、ヨーロッパ、東南アジアとも、本研究で後に詳細に論じるように、SVO語順の広がりの方が比較的後の時代の現象であったということを考えれば、かつては、やはり地球上の広範な地域をSOV語順が占めていたのではないかと思われる。

4. 語順の整合性および語順類型

近年の語順類型論では、特に Greenberg (1966)以降、種々の語順特徴の間の含意関係、さらには相関関係がとり上げられてきた⁶⁾。すなわち、前節でとり上げた節の基本語順のうち、特にOとVの配列順と、名詞句等における諸要素の配列順との関係である。

本研究で基本語順の資料としてあげられている語順特徴は、主語と直接目的語と動詞の配列順、接置詞(adposition)の種類(前置詞(PR)、後置詞(PO)、名詞の前後に置く両置詞(CP, circumposition))、所有者(G)、形容詞(A)、関係節(R)、指示詞(D)、数詞(NU)、数量詞(Q)、冠詞(AR)と、それらに対する主要部名詞(N)との配列順、比較構文における比較の基準(S)と比較の形容詞(A)との配列順、助動詞(AU)と動詞(V)の配列順、動詞(V)や形容詞(A)に対する副詞(AD)の配列順である。近年の語順類型論研究によって、言語は、修飾・限定要素と主要部、ないし、被支配項と支配項の配列を整合させる傾向、すなわち、いわゆるOV型ではOV PO GN AN RN DN NUN QN ARN SA VAU ADV ADAの配列をとり、VO型ではその正反対の鏡像的配列をとる傾向が知られており、多くの語順類型論研究で、この2つのタイプが何らかの形で念頭に置かれてきた。

本研究におけるこれらの特徴について、注意すべき点をいくつかあげておく。まず、接置詞については、Tsunoda et al. (1995, 743)でも言及されているように、接辞と厳密に区別し難いことも多く、特になじみの薄い言語に関して正確な判断を下すことは、しばしば困難である。そこで、これに関しても、原則として、当該言語の記述書や論文で接置詞として言及されているものを語順資料にとり上げることとした。Gについては、いわゆる所有代名詞ないし所有形容詞、あるいは所有接辞の配列順は除き、名詞による所有者を指している。Hawkins (1983)の語順資料では、前者については、Gとは別にPossとしてとり上げているが、所有代名詞のようなものは、音韻的に軽いものが多いこともあって、整合性よりもむしろ前節でも触れた重みないし複雑さによる配列原理等を受けやすく、接語化や接辞化も被りやすいので、本研究では、名詞のGのみを対象とした。数詞に関しては、序数詞ではなく基数詞のみをとり上げ、また、いわゆる分類辞(classifier)を持つ場合は、分類辞と数詞との前後関係ではなく、実際に数えられる対象の主要部名詞と数詞との前後関係を対象とする。ま

た、数量詞は、数詞を除いた狭義の数量詞(たとえば英語の all や some 等)のみを指している。比較構文では、Hawkins (1983)のように、しばしば比較の標識(M)(日本語の「より(も)」や、英語の than など)の語順もとり上げられてきた。しかし、比較の標識は、接置詞、接辞、格標識等、その実体の違いが大きく、前述のとおり、接置詞と接辞の厳格な区別はしばしば困難でもある。また、もし接置詞であれば、前置詞型言語ではMS語順になり、後置詞型言語ではSM語順になるのは当然の結果であり、もし接辞であれば、語順特徴に辞順(affix order)を持ち込むことになってしまう。また、実際上しばしば他の語順特徴と整合するのは、比較の基準と形容詞との相対的語順である。そこで、本研究では、比較標識は除き、比較の基準と形容詞の相対語順を対象とする。

また、本研究では、上にあげた種々の語順特徴に関して、収集可能な限り多くのデータを集め、それらの特徴を考察していくことになる。ただし、基本的には、それらの中でも特に、従来の多くの語順類型論研究と同様、便宜上、特に断りのない限りは、節語順、接置詞、所有者、形容詞の4つを主要な語順特徴として、これら4つが整合しているものを、整合的VO型あるいは整合的OV型(さらに、後述するように(S)OV PO GN NAのタイプを準整合的OV型)として言及することにする。これにはいくつかの理由がある。一つには、この4つの特徴が、Greenberg (1966)以来、Hawkins (1983)、松本 (1987)等、多くの語順類型論研究において主要な4大特徴として扱われてきており、それらとの連続性を保つ意味がある。また、語順類型の統計自体は本研究の主要な目的ではないが、実際に、下で行っているような統計をとりやすいという利点もある。さらに、これら4つ以外の特徴には、主要特徴として扱いにくい要因も若干存在する。いくつか例示すれば、たとえば冠詞や助動詞などは、そもそもそうした範疇を持たない言語も多々存在する。指示詞や冠詞は音韻的に小さいものが多く、整合性との相関が比較的弱い。数量詞は、日本語や英語などにも見られるように、直接的に名詞を修飾するよりもむしろ、副詞的に機能する場合も少なくない⁷⁾。さらに、前述したような方法で語順データを収集した場合、これら主要な4つの特徴に比べて、他の特徴に関する明確な基本語順データがしばしば不足しがちであるという現実的な問題もある。そこで、本研究では、語順の整合性に関して、最も基本的な部分を巨視的にとらえるため、整合性という用語の基本的な要件としては伝統的な4大特徴をとり上げ、他の特徴は、必要に応じて副次的、補足的に扱うことにする。また、整合的VO型という場合の節語順はVSO、SVO、VOSを包含するが、OVSとOSVの言語はごく少数のため、本研究で整合的OV型といった場合、特に断りのない限り、整合的SOV型を指している(後述の準整合的OV型についても同様)ことに注意されたい。これらのことは、実質上、Greenberg (1966)の先駆的研究以降、多くの伝統的な語順類型論において暗黙の前提にされてきたように思われる。

すでに述べたように、単純な言語数による統計が持つ意味には疑問が残り、また、本来、本研究における考察の主な対象は、語順の地理的および系統的な分布であって、統計的な分布ではない。しかし、今後の語順類型論研究の一資料として利用に供する目的も兼ねて、全体的な統計分布を把握しておくために、筆者の語順資料において、伝統的にとり上げられてきた4つの特徴すべてにつ

いて語順データが入手できた言語から、基本語順の比率を算出すれば、下のようになる。ただし、これは、大文字同士の共存を4大特徴の一部にでも持つ言語はこの統計資料から除き、小文字の共存は捨象して、最も基本的な語順を1つに特定した1,316言語のみに絞って算出したものである。

SOV PR NG NA	9	VOS PR NG NA	17
SOV PR NG AN	2	VOS PR NG AN	15
SOV PR GN AN	5	VOS PR GN AN	0
SOV PR GN NA	3	VOS PR GN NA	1
SOV PO NG NA	18	VOS PO NG NA	0
SOV PO NG AN	4	VOS PO NG AN	0
SOV PO GN AN	268	VOS PO GN AN	0
SOV PO GN NA	316	VOS PO GN NA	0
SVO PR NG NA	359	OVS PR NG NA	0
SVO PR NG AN	50	OVS PR NG AN	0
SVO PR GN AN	20	OVS PR GN AN	0
SVO PR GN NA	21	OVS PR GN NA	0
SVO PO NG NA	2	OVS PO NG NA	0
SVO PO NG AN	0	OVS PO NG AN	0
SVO PO GN AN	22	OVS PO GN AN	0
SVO PO GN NA	66	OVS PO GN NA	0
VSO PR NG NA	93	OSV PR NG NA	0
VSO PR NG AN	18	OSV PR NG AN	0
VSO PR GN AN	0	OSV PR GN AN	0
VSO PR GN NA	0	OSV PR GN NA	0
VSO PO NG NA	1	OSV PO NG NA	0
VSO PO NG AN	1	OSV PO NG AN	0
VSO PO GN AN	1	OSV PO GN AN	0
VSO PO GN NA	4	OSV PO GN NA	0

この統計において、整合的語順をとる言語は、整合的OV型が268言語、整合的VO型が469言語で、全体の56%を占めるが、逆に、不整合的な語順の言語も、全体の44%を占めている。このように、4つの特徴に限って統計をとった場合でも、個々の語順特徴に例外を持つ不整合的な組合せの言語も、数字の上でかなり多いことは事実である。

中でも、AとNの語順は、他の語順特徴との関連が比較的低く、特にSOVの言語においては、

SOV PO GN ANの268言語に対してSOV PO GN NAの316言語、あるいは、SOV & ANの279言語に対してSOV & NAの346言語のように、むしろ、NA語順の方が言語数では上回っているほどである。ちなみに、SOV & AN : SOV&NAは、Hawkins (1983, 288)の表からは98 : 76、松本 (1992, 164)の表からは280 : 275になる。また、Dryer (1989, 274)による言語群単位の比率では、48 : 68になる。形容詞がずれる要因については、NA語順がSVと同様に情報構造的に題目-評言(topic-comment)の順に従って優勢になりやすい傾向 (Greenberg 1966, 100-01)や、たとえばユマ諸語のように、その形容詞が動詞起源であるためにNAを取る傾向(Mallinson and Blake 1981, 385)などが指摘されてきた。形容詞は、しばしば言われるように、意味機能的には述語的機能と限定的機能を併せ持ち、形式的にも半ば動詞的半ば名詞的であるといった、範疇としての不安定性から、支配や修飾・限定の方向性とはしばしば離れて、語順の相関性が低くなっているのかもしれない。そこで、一つの考え方としては、形容詞を語順の整合性に関する主要特徴から除くことも可能であろう。しかしながら、形容詞は、上述の通りGreenberg (1966)以来伝統的にとり上げられてきた特徴であり、また、特に後述するような、形容詞が整合しない準整合的OV型を整合的OV型の亜種として扱える可能性からも、本研究では形容詞も主要特徴の一つとして残すことにする。

形容詞の逸脱において特に注目すべき点は、SOV PO GN NA のタイプが非常に多い点である。そこで、このタイプの扱いが問題となるが、これは、NA語順を除いて整合的OV型に近いので、整合的OV型と全く別個のタイプというより、準整合的OV型とでも呼んで、整合的OV型の下位類ないし亜種として扱うべきものであろう。統計的にも、整合的OV型と整合的VO型だけの割合は、上にあげた言語全体の56%にすぎないが、これに準整合的OV型を加えれば、整合的ないし準整合的タイプの割合は80%に達する。さらに、準整合的OV型を整合的OV型と合わせて整合的VO型と対峙させると、Yamamoto (1999,76)の地図に見られるように、整合的ないし準整合的OV型と整合的VO型とが、ちょうど地球上を同等に分かつように、それぞれ大きなまとまりをなして分布していることがわかる。すなわち、準整合的OV型が整合的OV型と共に整合的VO型に対するタイプとして位置づけられることが、地理的分布からも見てとれるように思われる。また、松本 (1987)やDryer (1988)も指摘するように、ウラル、アルタイ、ドラヴィダ、インド・アリア等ユーラシア大陸のSOV言語にANをとり、オーストラリア、ニューギニア、アメリカ大陸等のSOV言語にNAをとる傾向が見られ⁸⁾、しかも、準整合的OV型は、後者の地域においてある程度の地理的なまとまりをなして存在している。また、上述のように、形容詞は、伝統的に語順類型論の主要な特徴の一つに入れられつつも、実は本来、整合性を逸脱する傾向の強い特性なので、形容詞のずれを過大視すべきではなかろう。そこで、このタイプを形容詞が整合的でないという理由で単なる不整合なタイプの一つに含めてしまうよりは、むしろ整合的タイプの亜種として考える方が、かえって、世界諸言語の地理的ないし系統的分布の全体的傾向をとらえる上で有益と考えられる。

また、SVO語順は、動詞末位型や動詞初頭型と比べて整合性に関する語順の相関性が弱いものとして説明されることが多く(たとえばFinegan and Besnier 1989, 260-64, Burling 1992, 271-76等)、

事実、その傾向は見られる。しかし、統計的に見ても、整合的な SVO PR NG NA のタイプは、SVO 語順言語全体(540言語)の約66%を占め、また、個々のSVO語順タイプと比べた場合、この整合的タイプが圧倒的に多い。すなわち、比較的多いSVO PR NG ANタイプ(50言語)、SVO PO GN NA タイプ(66言語)に対して、359言語である。従来、SVO語順言語がしばしば整合性からずれると言われ、また、直感的にもそう感じられてきた大きな要因は、後に扱うように、特にロマンス語以外の多くのヨーロッパの(印欧系、ウラル系の)言語や中国語等の印象が強かったためという要因も考えられる。地理的に世界全体を見渡せば、特に、西アフリカ以外のアフリカ大陸、東南アジア、オセアニアのSVO語順地域において、SVO語順は、明らかに整合性に関してVO型の傾向を強く持っていることがわかる。また、地理的なまとまりから見ても、整合的SVO型は、これらの地域である程度のみをなした分布を見せているが、その他のSVO型には、あまりまとまった地理的分布が見られない。したがって、本研究では、やはりSVO語順も整合性に関してはVO型という視点から考えることにする。

以上の点を考慮した上で、再び、語順類型別の統計的割合に着目すると、前述のとおり、整合的語順を持つ言語が全体の56%を占めるが、逆に不整合的な語順の言語も44%を占めている。このように、確かに不整合的語順の言語数も相当数に達するので、この種の統計上の分布のみを見る限りでは、整合性の重要性に疑問が生じ、2つの整合的語順を重視し過ぎると結局過度の一般化をしてしまう危険性があるということから、たとえばHawkins (1983)のように、不整合的語順を考慮したさらに精密化した含意法則の確立に努める研究なども行われた。また、整合性を基本とした言語変化のとらえ方に対する疑義もしばしば提示されてきた(たとえば、Mallinson and Blake 1981, 419-36、Comrie 1989, 201-26、Burling 1992, 275-76 等)。しかし、以下に述べるいくつかの理由から、ここでは、上のような2つの整合的タイプを基準として立てることは、言語学的に相変わらず有益であると考える。

第1に、前に述べたように単純な数だけによる統計にはある程度の注意が必要だが、この2つの整合的タイプが、他の不整合的組合せを持つ個々のタイプと比較した場合に群を抜いて多数(上の4大特徴を組合わせた種々のタイプのうち、この2つだけで56%)を占めるという事実は、偶然の確率による割合12.5%を約4.5倍も上回り、言語学的あるいは類型論的に見てやはり無視できない事実である。さらに、準整合的OV型も合わせて考えればその割合は80%(偶然による割合14.6%)にも上る。また、言語数、語順データ共に少ないOS語順を別として、少なくともSO語順の言語に関する限り、統計的にもそれぞれの節語順の中では整合的ないし準整合的語順の優位が明らかに認められる。

第2に、初期の語順類型論学者たちによって言われたように、言語内的に見た場合、この2つのタイプには、やはり言語構造上ある種の一貫性が見られる。すなわち、前述のように、修飾・限定ないし支配の方向性を一貫させているわけである。科学において伝統的に「真理は単純、簡潔なものである」といった思想があるが、言語学の場合も、根底に流れる原理としてはできる限り単純な

原理を想定できることが理想であろう。そこで、語順の場合も、基本的な原理としてはやはり整合性という単純な原理が作用しており、その上に、特に本研究で考察するように、多くの場合、地理的ないし歴史的要因が重なって逸脱を生じていると考えることができる。

第3に、これが本研究における最も重大な理由でもあるが、この2つの整合的タイプは、地理的に位置づけて見た場合に、それぞれ比較的大きなまとまりをなした地域に現れている点である。統計的分布よりむしろ地理的分布に着目し、視覚的に語順地図の形にしてみれば、整合的語順タイプの優位性ないし重要性は一目瞭然となる。すなわち、整合的ないし準整合的OV型は、北アジアからコーカサス、南アジア、チベット・ビルマ諸語地域、さらに極東を囲む、いわばユーラシア大陸のほぼ北半分を占める広大な地域、また、中米と北西太平洋沿岸を除くアメリカ大陸の大半、ニューギニア、オーストラリアにおいて、大きな地理的まとまりを成して存在している。一方、整合的VO型は、ニューギニアとオーストラリアを除くオセアニア、東南アジア、中東からアフリカ大陸北部および赤道以南のアフリカの大半、西ヨーロッパから南ヨーロッパにかけての地域に、連続して存在している。その他の様々な不整合的タイプは、たとえ種々の不整合的語順類型をすべて合わせれば多数の例外が存在することになっても、いずれか一つの不整合的タイプだけで連続したまとまりをなして存在している地域は、地球上のどこにも見あたらない。これらの不整合的語順は、本研究で考察していくように、こうした整合的タイプの周辺に、それぞれの地理的ないし歴史的要因を持ちながらしばしば推移的に分布しており、言語接触や通時的变化の過渡期といった特別な要因のない場合の自然な状況下では、比較的成立しにくいタイプと考えられる。そこで、この2つの整合的タイプの重要度は地理的分布からも裏づけられ、この2つのタイプを軸に見ていくことによって、地理的な語順類型に関する有意義な結果をもたらすことができるのである。先にあげたような整合性に対する疑問も、従来、地理的な分布を十分観察せずに、地理的側面を捨象した単なる統計的分布を見ていたことによって生じた批判が多いように思われる。したがって、やはり、初期の類論学者たちが考えた語順の整合性という考え方は基本的に誤っておらず、相変わらず人類言語において、きわめて有用かつ重要な位置を占めるものと考えられる。

5. 従来の研究および本研究の位置付けについて

語順類型論は、Greenberg (1966)による先駆的な研究以来、言語類型論全体の中でも最も多くの研究がなされてきた領域でもあるため、すでに従来の語順類型論研究に関する概観、論評も多くなされてきている(Mallinson and Blake 1981, chapters 3, 6, 柴谷 1989, 25-40, Comrie 1989, chapter 4, Whaley 1997, chapter 5, Song 2001, chapter 2等)。そこで、本稿では過去の語順類型論研究の足跡を逐一詳細にたどることはせず、主な研究を簡略に概観するとどめ、総合的にそれらの研究全体に対して、本研究の位置づけを述べることにする。

Greenberg (1966)は、近代的類型論による語順研究の先駆的な役割を果たした論文である。ここにおいてGreenbergは、30言語のサンプルを基に、語順を中心とした種々の特徴に関して、主として

含意的普遍性の形によって多くの普遍法則を提示した。そして、「調和(harmony)」という概念によって整合的な語順類型に通ずる考え方を示すとともに、「優勢(dominance)」という概念によって、言語一般に優勢な無標の語順をとらえようとした。

その後、このGreenbergの研究に触発されて、多くの語順類型論研究が生まれたが、特に、節語順から主語を除いて動詞と目的語の間の相対的語順を用いて、前述したような、いわゆる整合的OV型と整合的VO型という2つの主要タイプを明確に立てたのが、Vennemann (1974)や Lehmann (1973; 1978)である。Vennemannは、OV、AN、GN、RN等の種々の配列順に関して、操作子(operator)と被操作子(operand)という概念を用いて、操作子-被操作子の順か逆の順で一貫させる、整合的な2つの語順類型を提示した。Lehmannは、OとVを互いの主要共起要素(primary concomitant)と呼び、それぞれの修飾要素が主要共起要素と反対側に来て、OとVの断絶を避けるという原理を提唱している。いずれにしても、彼らの研究は、整合的OV型と整合的VO型という語順の整合性を中心にとらえる初期の語順類型論の代表的な研究と言えよう。

その後の語順類型論でも、何らかの形でこの2つの整合的語順類型が念頭に置かれてきたが、先にあげた統計からも示唆されるように、現実には整合性に反する言語も多数存在する。そこで、特に Hawkins (1983)は、Greenbergのような語順データを336言語まで拡大し、それらのデータを基に、たとえば $PR \wedge (VSO \vee SOV) \supset (NA \supset NG)(PR \text{ かつ } (VSO \text{ または } SOV))$ という条件の下では、 $NA \supset NG$ という含意関係が成立する)といった、複合的な含意的普遍性を立てることにより、(条件が厳しくなることによって、その分、適応される言語が少なくなり、普遍性としての意義に疑問が生じるという意味で諸刃の刃ではあろうが、)こうした含意的普遍性を、単なる普遍的傾向ではなく、例外のない絶対的普遍性にまで高めていった。同時に、特に整合性にとって例外となる言語を説明し得るような配列原理として、「範疇間調和の原理 (Cross-Category Harmony Principle)」と、「重みによる配列原理 (Heaviness Serialization Principle)」といった原理を提示している。前者は、1つの範疇の主要部に先行(後続)する従属部の割合が、別の範疇の主要部に先行(後続)する従属部の割合に等しくなる傾向を表している。後者は、関係節、所有者、形容詞、指示詞および数詞の順に、主要部名詞に対して右方に置かれる傾向、すなわち、一般に重い複雑な要素が右方に置かれやすい傾向を表したものである。

Tomlin (1986)は、節語順のみに関するデータを1,063言語まで拡大し、そのうち402言語のサンプルに基づいて先にあげたような統計結果を出し、 $SOV=SVO>VSO>VOS=OVS>OSV$ という相対的頻度を提示している。上述したようにこの頻度順には問題があるが、彼は、この統計的分布に対して、3つの原理を立てることで説明している。すなわち、「主題第一原則 (Theme First Principle, TFP)」(主題が前に置かれるという原則)、「有生物第一原則 (Animated First Principle, AFP)」(有生物が前に置かれるという原則)、「動詞-目的語結束 (Verb-Object Bonding, VOB)の原則」(動詞と目的語が隣接するという原則)である。つまり、これらの原則を各節語順に照らしてみると、SOVとSVOは3つの原理に適合し、VSOは2つの原理(TFPとAFP)に適合し⁹⁾、VOSとOVSは1つの原理(VOB)にのみ適合

し、OSVはいずれの原理にも反するので、上記のような統計上の生起頻度を生じていると説明している。

Dryer (1992) は、彼の625言語の語順データを利用して、語順の相関関係に関して、「分岐方向理論 (Branching Direction Theory)」を提唱している。すなわち、種々の範疇を、十分に繰り返しの句範疇(自身以外の句範疇を支配できる句範疇)と、枝分かれしない非句範疇(いわば単独語)ないし十分に繰り返しの句範疇とに分類した上で、言語というのは、それらの範疇の配列に関し、前者を後者の前に置く左枝分かれ方向と、前者を後者の後ろに置く右枝分かれ方向のいずれかに一貫させる傾向があるとしている。

Hawkins (1994) は、ある節点の最初の直接構成素の認識後、可能な限り早期に、その節点のすべての直接構成素を認識できるような語順が優先されるという趣旨の「早期直接構成素 (Early Immediate Constituent) の原則」を立てている。彼は、こうした統語構造解析上の心理的プロセスの効率性の観点から、世界諸言語における種々の配列順の統計的生起頻度の偏りについて予測ないし説明を試みているが、地理的ないし系統的分布でなく、数的な分布のみをとり上げて言語内的な観点から説明するという姿勢は、Hawkins (1983) と同様である。

以上のような、従来の代表的な語順類型論研究に共通する特徴としては、基本的に地理的、系統的な局面を排除し、語順の統計的な分布を見出し、それに対して、どのような語順原理を用いて、いかに理論的な説明を与えていくかという方向と総括できるだろう。近年の言語類型論では、正しい言語普遍性を得るために、地理的、系統的、類型的に偏らない言語データをサンプルに求めることが原則である(Comrie 1989, chapter 1 参照)。そこで、一度、偏りのないサンプルを選んでしまえば、後は言語普遍性の探究が主たる関心の対象となるために、言語の地理的、系統的な側面を捨象した状態で研究し、通常、そうした側面に再び立ち返ることはない。すなわち、言語普遍性研究と密接な結びつきを有する近年の言語類型論においては、言語の系統、地理的位置というのは、特にそのサンプリングの段階において、むしろ避けるべき要因であった。その点は語順類型論も例外ではなく、Greenberg による語順に関する先駆的な研究以来、主に、言語内部の種々の語順原則に着目して、言語普遍性の探究を目的としてきたために、個々の言語の地理的ないし系統的分布とはほとんど無関係に、種々の語順特徴の組合せのタイプに見られる統計的な偏りに主な関心が向けられ、言語内の視点から言語普遍性を探究するものが大部分であった。

しかし、語順というのは、本研究からも明らかのように、地理的および歴史的な影響を非常に受けやすい現象である。そのため、地理的、歴史的な要因を排除してしまえば、人類言語の語順類型の一面しかとらえられず、重要な側面が見落とされてしまうことになる。語順類型の真の姿あるいは全体像を正しく十分に理解するためには、単に統計的な分布、偏りを見て、言語内部の要因に着目するだけでなく、むしろ、各言語がいつごろからどこで話され、どの系統に属し、どのような歴史的変化をたどったかといった、地理的、歴史的な要因を積極的に考慮しつつ、世界諸言語の語順類型の地理的、系統的な分布を考察していく必要がある。それにより、人類言語にとっての整合的

語順類型の重要性や、個々の言語が不整合語順をとっている理由ないし背景を理解することも可能になるであろう。実際のところ、地理的、系統的要因を捨象して統計的分布を基に言語内の普遍性を探求、説明する方向の語順類型論研究は、特に最近10年の間に目立った大きな研究としては上述のHawkins (1994) が見られる程度である。それ以外では、たとえばPayne (1992) や Downing and Noonan (1995) 等の、語用論的ないし談話構造的要因による語順の揺れや分布を探求するような視点を変えた研究も現れたが、いずれにしても、この種の言語内の語順類型論研究は一通り出尽くした感がある。また、地理的、歴史的要因を捨象した語順類型論研究であるという点では、今あげたような、語用論的ないし談話構造的な方向の語順類型論研究も同様である。ただし、上にあげたような従来の語順類型論研究およびこの節であげる諸分野における、それぞれの研究自体の意義、重要性を否定するものではなく、また、そのような過去の研究に対する批判が本研究の意図するところではない。単に、従来の多くの研究では、本研究で扱われるような、世界全域にわたる語順類型の地理的および系統的な分布という観点が見過ごされがちであったということである。

上にあげた研究に対し、Dryer による一連の研究や、松本 (1987)ないしMatsumoto (1992)等は、語順類型論に地理的、系統的な要因を組み入れた先駆的研究である。筆者自身の研究も、これらに大いに触発され、多くの刺激を与えられたが、筆者の研究とは、その目的、対象、アプローチの仕方等において、以下に述べるように異なっている¹⁰⁾。

Dryer (1988, 1989, 1992)は、地理的、系統的な観点をとり入れているという点では筆者の研究に近い。しかし、彼は、世界に5つないし(Dryer 1992では)6つの言語地域を設けて、それまでのサンプリングなしの、または不十分な統計分布を正して、各地域における、言語よりむしろ前述の言語群(*genera*)単位での語順タイプの数的偏りを観察している。そして、世界諸言語の地理的、系統的な語順分布のあり方やそれらの変遷自体を考察するというより、結局は、地理的、系統的偏りを考慮した言語群単位ではあるにせよ、研究の対象および結果として統計的偏りの方を重視し、前述の分岐方向理論のような言語普遍性の探求の方に関心、重点が置かれている。その後の彼の研究では、たとえばDryer (1997)は、伝統的なSOV、SVO、VSO、VOS、OVS、OSVの6通りに均等に分けた類型法よりも、OV対VOおよびSV対VSという、二元的なパラメーターによる類型法の方が望ましいことを論じており、Dryer (2000)は、Maslova (2000)の批判に答えて、再び、言語でなく言語群を数えることの必要性、有効性を説いている。これらも、地理的、系統的な分布から世界諸言語の語順類型を考察した研究ではない。ただし、最近、Dryer (1999)でSVO言語におけるGN語順とNG語順の分布に関して筆者の研究(Yamamoto 1999)と同様な結論を得たという趣旨の手紙が、同論文と共にDryerより筆者の手元に送られた。同論文では、この分布に関する最も有効な予測は地理的分布により与えられるとしており、最近では、Dryer 自身、筆者と同様、地理的分布を語順に対するより直接的な要因として考察する方向に向かいつつあるのかもしれない。しかし、いずれにせよ、Dryerの一連の研究の主な対象ないし目的は、実際の地理的および系統的な語順分布の考察や、その系統的、歴史的背景や変遷等の考察よりは、むしろ言語群による統計的分布や普遍性自体の探求に中心があ

り、筆者の研究と矛盾ないし対立するものではないが、その対象、目的は異なっている。

松本の研究は、それ以前のどの語順類型論研究よりも多数の言語データ(松本 1987では約1,400言語、Matsumoto 1992では約1,570言語)を扱っている。この研究には、筆者自身も初期の語順データ収集において関わり、特に語順類型論における地理的観点の重要性を初め多くの事を学び、その恩恵は計り知れない。ただし、種々の言語特徴に関して、世界の各地域ごとの語順タイプの詳細な分布やその変遷、古い時代の語順分布を考察するのではなく、Greenberg 以来の伝統的な4つの語順特徴に限って、それらのタイプの統計的偏りを出し、その4つの語順特徴の組み合わせごとに、どの語順類型がどこに見られるかという視点から、それらの語順タイプ別の分布に関して、比較的短い記述の中で大まかな概観を与えるにとどまっている。また、その後の松本の研究は、従来の歴史・比較言語学の限界を越えた、より遠い類縁関係を探求するという目的のために、基礎語彙以上に安定し、言語普遍性までは至らないような、言語にとって本質的な種々の特徴の分布を研究する方向に向かっている(たとえば、松本 1994, 1998, 2000)。その点、語順は、本研究で見られるように、むしろ地理的影響による変化を非常に被りやすい特徴であるために対象外となり、やはり、筆者の研究とは目的、対象が異なってきている。

また、従来の言語類型論研究では、上述したように、主に普遍性研究の目的からサンプリングをかけるのを通常としていることもあり、実際にデータの収集される言語の数は、数十言語か、せいぜい数百言語である場合がほとんどである。これまでのところ、類型論に限らず、3,000言語近くの言語資料を用いた言語研究はなかったと思われる。むしろ、それでも世界の6,000以上の言語からすれば半数弱であり、過去に死滅したそれ以上に膨大な数の言語を考えれば、人類言語の一部にすぎないが、それは、すべての言語学者が負わざるを得ない制約である。いずれにせよ、扱われた言語データ量という意味でも、本研究において扱われた語順の地理的、系統的分布に関する考察は、従来の研究に比べて相当の実体性を持ち得るものと思われる。

本研究では、地理的、系統的な観点を中心になることから、類型論以外で本研究と関係する従来の言語学の研究分野としては、他に歴史・比較言語学や言語地理学なども考えられる。しかし、いずれの分野においても、そこに多少とも類型論的観点をとり入れたものも含め、従来の類型論研究と同様、本研究で扱うような、総合的に世界全体にわたる語順の地理的分布およびその歴史の変遷を探究するような視点は、一般にこれまで欠けていた部分である。

歴史・比較言語学では、周知のように、音韻、形態面が伝統的な主たる研究対象であり、語順のような統語面の研究は、それらに比べれば厳密な証明手段に乏しいことから、伝統的にはほとんど対象となることがなかった。近年になって、語順類型論に対する関心の高まりと共に、語順再建の試みも、ある程度は行われるようになってきたが、それも、ごく一部の、特定の語族ないし語派に対する部分的な研究に限られ、より広範な、世界諸言語全体の視点からの語順変遷に対する研究はほとんど行われていない。類型論の中で語順の歴史的变化が扱われる場合も、初期のGreenberg (1966)の段階からすでに、たとえばVOやNGから前置詞が発達する過程の説明などが見られるが、

概してこのように言語内的な観点からの理論的説明が中心で、地理的、系統的な分布のあり方から語順変化を地球規模で考察するような視点はとられてこなかった。また、比較言語学においては、原則として、同系言語内部における分岐を中心とした見方が主であって、系統の異なる言語同士の接触による収束の現象については、比較的狭い範囲において、個別に借用、言語連合、波動説等の中で言及されることがあるという程度で、やはり、広域にわたるものは少ない。

言語地理学は、地理的にも系統的にも狭い範囲において、同系言語内や同一言語の方言間の地理的な変異を対象としたものに限られ、系統の違いを超越した諸言語間の研究、特に、地球規模での地理的分布を対象とすることはほとんどない。類型論的な研究としては、橋本(1978)が言語類型地理論の名で中国語を中心に東アジアの言語特徴の変異を地理的、歴史的な観点から説明しているが、その対象はやはり東アジアに限られ、言語類型地理論においても、そうした観点から、巨視的、総合的に世界全体の語順分布を研究するには至っていない。

一般に、言語が類似する要因としては、Comrie (1989, 201)も指摘するように、比較的些少な偶然性を除けば、1. 系統的要因(同系統)、2. (主として地理的な)言語接触、3. 類型論的特徴ないし言語普遍性が考えられ、当該の類似がいずれの要因に起因するものか見極めることは、しばしばきわめて重要となる。歴史・比較言語学では、特に言語の系統を問題にする時、1を2や3からできる限り厳密に区別して取り出そうとするのに対し、言語類型論では、原則的に、3に1や2の要因を持ち込むことのないようにして、真の言語普遍性を発見しようとする。しかし、語順というのは、理論的には類型論的特徴ないし言語普遍性の問題と考えられるだろうが、本研究のように、実際に世界全体について言語地図や系統別分布表を作って考察してみると、系統的ないし通時的要因、地理的な言語接触、ないしは種々の言語外現実の影響を強く被りやすい、また実際に被っている現象であると見ることができる。従って、語順類型の研究には、単に類型論的な視点ばかりでなく、これらの種々の観点を統合した総合的なアプローチをとることが求められると思われ、まさにそのような観点が従来の語順研究に欠けていた面であろう。そこで、本研究では、こうした言語学の中の、ある特定の個別分野だけの視点にとらわれず、さらに歴史学、考古学、自然地理学、人類学等、言語学以外の諸分野の成果も含めた総合的な観点から、地球規模での語順の地理的および系統的分布について、その実際の分布のあり方および歴史的変遷を探究する。

また、上述のような本研究の目的から、従来の伝統的な語順類型論あるいは多くの言語類型論研究と異なり、あえて言語資料に対するサンプリングを避けた理由も明らかであろう。すなわち、種々の類型に関して統計的分布をとり、それに基づいて言語普遍性を探求する伝統的な類型論研究においては、地理的、系統的、類型的な偏りを避けた良質のサンプリングがきわめて重要となる。実際、サンプリングについては、これまでも類型論において盛んに議論されてきた¹¹⁾。確かに、正しい普遍性を発見する目的のためには、それらのサンプリングは有効であろう¹²⁾。しかし、本研究の目的は、言語普遍性自体の研究、およびそれと密接に結びついた統計的分布の考察にあるのではなく、むしろ、世界における、具体的な語順の地理的および系統的な分布やそれらの歴史的変遷の

あり方を考察することにある。そのためには、サンプリングによって地理的、系統的、類型的な偏りを排除してしまうことなく、収集し得る限り多くの言語に関する基本語順の資料を用いて、現実には、どのような地域で、どのような系統に属する言語が、どのような地理的、歴史的要因を負いつつ、どのような語順類型をとっているかを具体的に観察していくことが、むしろ重要になる。

元来、類型論におけるサンプリングが理想とする目的は、その研究に対して、誰が行っても常に同じ結果を生じるような客観性を与えることであろう。確かに、統計的偏りに基づく類型論的な普遍性研究では、とり上げた言語データのサンプルによっては異なった結果を生じ得る。その点では、本研究のように、収集し得る限りのデータを用いる方法の場合も、とり上げた言語資料の中身によって異なった研究結果を生じてしまうことは、理論的にはあり得るし、また、データが十分に大きくない場合には、現実的にも十分起こり得ることである。しかし、本研究のように、世界の言語の半数弱にあたる3,000近い言語のデータを基にすれば、結果的に世界のほぼ全域、全系統に属する言語を覆うことになり、たとえば将来、この言語数を倍にした研究が可能になったとしても、もはや研究結果にそれほど大きな違いを生じることは、実際的にはほとんどあり得ないものと思われる。実際、前に触れたように、本研究程度まで語順資料を収集すれば、もはや、地理的、系統的に考えて予想外の語順に遭遇することはほとんどなく、その言語の地理的位置と系統が与えられれば、その基本語順について、かなりの程度正確な予測も可能になってきている。

さらに、本研究のように、サンプリングせずに最大限多数の言語データを収集する方法は、統計的偏りを基にした普遍性研究にとっても、ある程度の有効性を持ち得る。そもそも、人類言語にとって現れやすいタイプは現実にも多く現れ、現れにくいタイプは現実にもあまり現れないことが予想される。したがって、たとえその割合の正確な数字自体にはあまり有効性がないとしても¹³⁾、本研究のようなデータによっても、類型の現れやすさに関してある程度の示唆は得られ、本研究の語順データは、人類言語全般における語順の統計的分布を研究していく場合のデータベースとしても価値を持つ。また、現実的問題としては、基本語順を抽出できるほどに研究された言語数が限られているので、その中でできるだけ多く収集することには、それ自体価値がある。ただし、これらは、本研究にとっては、目的とする意義ではなく、単に結果としての意義である。

いずれにせよ、本研究の目的は、サンプリングしたデータを基に、統計的な分布によって言語普遍性を探求することではない。むしろ、収集し得る限りの語順データを収集し、それを基に、世界全域にわたって、地理的、系統的ないし歴史的要因によって、いかに諸言語の語順が分布し、どのように変異してきたかを探求することである。したがって、本研究の目的のためには、サンプリングによって、語順データを限定してしまうのではなく、できる限り多くの言語の語順データを収集し、それらの分布のあり方を考察していく必要がある。

6. 結びおよび展望

本稿では、世界諸言語における語順類型の地理的および歴史的な分布研究全体に対する序説とし

て、語順類型論における主要な概念である基本語順と語順の整合性や、本研究における語順データに関して論じ、さらに、基本的な語順分布や語順研究における地理的、系統的観点の重要性や、従来の研究と比較して、本研究が持つ意味、位置づけ等に関して論じてきた。

本稿の議論や前提に基づいて、この研究全体では、具体的に世界諸言語の地理的、系統的な語順分布について論じ、まず、収集した世界諸言語の語順データを実際に地図上に位置づけ、系統的に分類してみた場合、語順類型がどのような分布をなすかを各地域別に考察し、以下の点を地球規模において実証する。すなわち、人類言語の語順類型は、地理的ないし系統的観点から見れば、やはり整合的語順類型というものがきわめて重要な地位を占め、整合的VO型と（準）整合的OV型が地理的、系統的にほぼ同等の大きなまとまりをなして存在している。それに対して、種々の不整合的語順類型は、すべてを合わせれば数の上で多数を占めたとしても、いずれか一つのタイプだけで大きなまとまりをなすことはなく、地理的な言語接触ないし歴史的な語順タイプの推移といった要因を負いながら、大きな整合的語順類型のまとまりの周辺に、しばしば連続的に推移しながら存在しているにすぎない。さらに、共時的には整合的VO型と（準）整合的OV型とが地球上をほぼ同等に分け合う現在の地理的分布も、現在話されている言語および記録の残っている言語から、さかのぼれる限りさかのぼっていくと、かつては地球上の大部分の地域がSOV型の言語で占められていた可能性が最も高いと考えられる。

【注】

- 1) 本稿は、現在執筆中の『地理的および系統的観点から見た世界諸言語の語順分布』の序論の部分に基づいている。したがって、本稿における「本研究」とは、同著作全体を指している。
- 2) その種の研究の例として、本研究のほか、種々の類型論的特徴について世界における地理的分布を調べ、さらに、それらを基に言語の遠い類縁関係を探求しようとする松本(2000)の研究は示唆的で、今後の類型論や系統論を研究する上で重要な意味を持つものと考えられる。
- 3) 実際、本研究における語順収集の過程で、当該の地域ないし系統グループにおける相当数の言語に関する語順データが得られた後は、予想外の語順データに遭遇することは非常に少なくなった。
- 4) たとえば、*Ethnologue* は、基本的に現存の言語を対象としているので、セム語派を東(死滅)と西に分けずに、中央と南にのみ分けているが、本研究では死滅した言語も、語順資料が入手できる限りはとり上げているので、東と西の区別も含めている。
- 5) Greenberg (1963)、Ultan (1969)、Mallinson and Blake (1981)のサンプルに対する批判は、Tomlin (1986, 19-20) 参照。また、Tomlin (1986)のサンプルは、基本的に、各語族に属する言語数に応じてサンプル言語が代表されるように配慮したものである。しかし、ある語族に属する言語の数は、言語上の要因よりむしろ、政治的ないし歴史的な事情によることが多いため、言語数の多い語族を相対的に大きく代表させることに、類型論的にどれほどの意義があるか疑問である。
- 6) 厳密には、語順類型の整合性のような概念に関しては、Greenberg 以前にも、Henri Weil(19世紀後半)やLucian Tesnière(1950年代)等により指摘されており、また、プラーグ学派による機能主義的な語順研究なども存在するが、本研究の議論には直接関係しない。こうした、Greenberg 以前の語順研究に関する概略は、たとえば松本(1989, 3-10, 14-16)を参照されたい。
- 7) その他、4大特徴に入れた形容詞は、特に整合性からの逸脱が著しい範疇であるが、これについては後述する。
- 8) ただし、これは絶対的なものではなく、あくまでも傾向であり、たとえば、ユーラシアにおいてもバスク語

やかなり多くのチベット・ビルマ諸語はSOVだがNAである。

9) VSO語順においては最も主題になりやすい主語が文頭に位置しているわけではないが、より主題性の高い主語が、より主題性の低い目的語の前方に来ていることから、Tomlinは、VSOもTFPに適合しているものとみなしている。

10) その他、必ずしも言語学の立場のものではない(むしろ文化地理学)が、語順を地理的観点から扱った研究として、諏訪(1993)の研究がある。同論文は、橋本(1978)の研究を発展させて、アジア地域を中心とした語順の地理的分布をとらえて、語順類型を農耕型と牧畜型のような文化的特徴と結びつけた論を展開している。しかし、本研究では、語順のような文法的特徴を文化的特徴に直接関連づけることは、あまりに憶測的になりすぎるので避ける。

11) 類型論におけるサンプリングに関する概説あるいは問題点については、Comrie(1989, 5-12)、Whaley(1997, 36-43)、Rijkhoff and Bakker(1998)、Newmeyer(1998, 306-13)、Song(2001, 17-39)等を参照されたい。

12) ただし、実は、普遍性の研究を目的とした場合であっても、サンプリングをせずにできる限りデータを集めることが重要な場合がある。それは、あるタイプが存在しないこと、厳密に言えば、存在しない可能性が高いことを実証する場合である。

13) 実は、たとえばに良質なサンプリングをしたところで、記録を残さずに死滅した多数の言語は入らないので、厳密に言えば、その正確な数字そのものの有効性には常に疑問が残る。

【参考文献】

- Bright, William, ed. 1992. *International Encyclopedia of Linguistics*. 4 vols. Oxford: Oxford UP.
- Burling, Robbins. 1992. *Patterns of Language: Structure, Variation, Change*. San Diego: Academic P.
- Comrie, Bernard. 1989. *Language Universals and Linguistic Typology*. 2nd ed. Oxford: Basil Blackwell.
- Dik, Simon C. 1978. *Functional Grammar*. New York: Academic P.
- Downing, Pamela, and Michael Noonan, eds. 1995. *Word Order in Discourse*. Typological Studies in Language 30. Amsterdam: John Benjamins.
- Dryer, Matthew S. 1988. "Object-Verb Order and Adjective-Noun Order: Dispelling a Myth." *Lingua* 74:185-217.
- . 1989. "Large Linguistic Areas and Language Sampling." *Studies in Language* 13: 257-92.
- . 1992. "Greenbergian Word Order Correlations." *Language* 68: 81-138.
- . 1997. "On the Six-Way Word Order Typology." *Studies in Language* 21: 69-103.
- . 1999. "Explaining the Order of Genitive and Noun in SVO Languages." Paper Presented at the Association of Linguistic Typology Conference in Amsterdam.
- . 2000. "Counting Genera vs. Counting Languages." *Linguistic Typology* 4: 334-56.
- Finegan, Edward, and Niko Besnier. 1989. *Language: Its Structure and Use*. San Diego: Harcourt Brace Jovanovich.
- Greenberg, Joseph H. 1966. "Some Universals of Grammar with Particular Reference to the Order of Meaningful Elements." *Universals of Languages*. 2nd ed. (1st ed, 1963.) Ed. Joseph H. Greenberg. Cambridge, MA: MIT P, 73-113.
- Grimes, Barbara F., ed. 1992. *Ethnologue: Languages of the World*. 12th ed. Dallas, TX: Summer Institute of Linguistics.
- , ed. 1996. *Ethnologue: Languages of the World*. 13th ed. Dallas, TX: Summer Institute of Linguistics.
- , ed. 2000. *Ethnologue: Languages of the World*. 14th ed. Dallas, TX: Summer Institute of Linguistics.
- 橋本萬太郎 1978 『言語類型地理論』 弘文堂
- Hawkins, John A. 1983. *Word Order Universals*. New York: Academic P.
- . 1994. *A Performance Theory of Order and Constituency*. Cambridge: Cambridge UP.
- Jakobson, Roman. 1966. "Implications of Language Universals for Linguistics." *Universals of Languages*. 2nd ed. (1st ed., 1963.) Ed. Joseph H. Greenberg. Cambridge, MA: MIT P, 263-78.
- 影山太郎 1985 「世界のことば - 多様さと共通性」 藤田実・平田達治編 『ことばの世界』 大修館書店, 15-

- Lehmann, Winfred P. 1973. "A Structural Principle of Language and Its Implications." *Language* 49: 47-66.
- . 1978. "The Great Underlying Ground-Plans." *Syntactic Typology: Studies in the Phenomenology of Language*. Ed. Winfred P. Lehmann. Austin: U of Texas P, 3-56.
- Mallinson, Graham, and Barry J. Blake. 1981. *Language Typology: Cross-linguistic Studies in Syntax*. North-Holland Linguistic Series 46. Amsterdam: North-Holland Publishing Company.
- Maslova, Elena. 2000. "A Dynamic Approach to the Verification of Distributional Universals." *Linguistic Typology* 4: 307-33.
- 松本克己 1987 「語順のタイプとその地理的分布－語順の類型論的研究, その1」『文藝言語研究(言語篇)』第12号, 1-114頁
- . 1989 「語順のタイプと線状性の原理：語順の類型論的研究, その2」『文藝言語研究(言語篇)』第15号, 1-67頁
- . 1991 「主語について」『言語研究』第100号, 1-41頁
- . 1994 「世界諸言語の類型地理と言語の遠い親族関係」『言語類型地理論シンポジウム論文集』(遠藤光暁編<中国における言語地理と人文・自然地理>7), 96-135頁
- . 1998 「流音のタイプとその地理的分布－日本語ラ行音の人類言語学史的背景」『一般言語学論叢』第1号, 1-48頁
- . 2000 「世界諸言語のキョウダイ名－その多様性と普遍性」『一般言語学論叢』第3号, 1-55頁
- Matsumoto, Katsumi. 1992. "Distributions and Variations of Word-Order: A Typological and Areal Study." *Kansai Linguistic Society* 12: 155-64.
- Moseley, Christopher, and R. E. Asher, eds. 1994. *Atlas of the World's Languages*. London: Routledge.
- Newmeyer, Frederick J. 1998. *Language Form and Language Function*. Cambridge, MA: The MIT P.
- Payne, Doris L., ed. 1992. *Pragmatics of Word Order Flexibility*. Typological Studies in Language 22. Amsterdam: John Benjamins.
- Rijkhoff, Jan, and Dik Bakker. 1998. "Language Sampling." *Linguistic Typology* 2: 263-314.
- Ruhlen, M. 1975. *A Guide to the Languages of the World*. Stanford: Language Universals Project, Stanford U.
- 柴谷方良 1989 「言語類型論」太田朗編『英語学大系6：英語学の関連分野』大修館書店, 1-179頁
- Song, Jae Jung. 2001. *Linguistic Typology: Morphology and Syntax*. Harlow: Longman.
- 諏訪哲郎 1993 「チベット・ビルマ系民族の成立過程に対する言語類型地理論的考察」中島幹起編『言語文化接触に関する研究 第6号』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1-72頁
- Tomlin, Russel Schenk. 1986. *Basic Word Order: Functional Principles*. Croom Helm Linguistics Series. London: Croom Helm.
- Tsunoda, Tasaku, et al. 1995. "Adpositions in Word-Order Typology." *Linguistics* 33: 741-61.
- Ullian, R. 1969. "Some General Characteristics of Interrogative Systems." *Working Papers on Language Universals* 1: 41-63. Stanford: Language Universals Project, Stanford U.
- Vennemann, Theo. 1974. "Analogy in Generative Grammar: The Origin of Word Order." Proceedings of the *Eleventh International Congress of Linguistics* (held in Bologna, 1972). Ed. Luigi Heilmann. Bologna: Il Mulino, vol. 2, 79-83.
- Whaley, Lindsay J. 1997. *Introduction to Typology*. Thousand Oaks: Sage Publications.
- Yamamoto, Hideki. 1999. "A Survey of Areal Distribution of Word Order around the World." *Sprachtypologie und Universalienforschung* 52: 64-77.